

## 中野聡・安村直己（編）2023 『太平洋海域世界 ～20世紀』

岩波書店

小林 誠

本書は、全24巻『岩波講座 世界歴史』の一つとして刊行されたオセアニアの歴史である。計17名の執筆者の専門は歴史学のみならず、考古学、地域研究、社会学、国際関係学などと幅広いが、多くが文化／社会人類学である。構成としては「展望」（1論文）、「問題群」（6論文）、「焦点」（5論文）に分かれており、他にも「コラム」が5つ挿入されている。講座全体の編集方針によると、「展望」は「対象地域・時代の通史を描く」、「問題群」は「特に問題となるテーマを掘り下げる」、「焦点」は「さらに個別的なテーマで時代像を補完する」とあり、展望・問題群・焦点の順にマクロな視点からミクロな視点で歴史を描くように配置されている。また、編集方針として「単なる地域史ではなく、その地域から見た『世界史』になって」いること、「ジェンダーや文化の視点、マイノリティへのまなざし、日本列島史との統合的な把握」と書かれており<sup>1)</sup>、グローバル・ヒストリーといった世界全体の歴史と、現地社会の多様な視点からの歴史を両立させることを目指したものであるといえる。

この点を踏まえた上で、まずは本書を章ごとに概略していきたい。コラムも大変興味深い<sup>2)</sup>が、ここでは割愛する<sup>2)</sup>。

まず、「展望」の「人、島、海、出遭い——太平洋海域世界史の困難と可能性」（棚橋訓）では、「太平洋海域世界」は「太平洋（Pacific Ocean）という大海とそれを取り囲む環太平洋地域からなる世界」であり、その歴史は「太平洋を正面に見据えた地球の「水半球」（water hemisphere）の歴史」であると説明される。そして、太平洋の島々到人々が渡ってきた経緯、ヨーロッパ人による太平洋への探検航海による「発見」、キリスト教の布教、植民地支配とそれへの抵抗、さらに「歴史を取り戻そうとする」現在の実践を豊かに描いていく。特徴的なのは、歴史を「同時併行で起きた双方向的かつ重層的な出来事」としての「出遭い」ととらえる点である。そこでは「それぞれに自前の哲学や認識の枠組み」によって他者が解釈されるが、その過程で「自前の枠組み」が「拡張・改変・破壊」され、「自己理解」の変更が求められるという。ヨーロッパ人による「発見」は「素朴で高貴な野蛮人」などといった空想イメージを生み出し、あるいは18世紀後半において啓蒙思想を体現したクックの探検航海に代表されるように、知識の獲得によって他者や土地を「領有」してきた。一方

で、「出遭い」はヨーロッパ人にとって他者を「再発見」し、自己理解の変容を促す機会にもなっていたと論じる。また、オセアニアの人々もヨーロッパ人を自らの宇宙観の中で解釈し、例えば、ハワイを訪れたクックはロノ神として歓待され、その後、ロノ神として殺害されてしまったというのである。

「問題群」の6論文がそれに続く。「太平洋世界の考古学」（後藤明）では、大航海時代以前の文字資料がない「先史時代」を解き明かすのが考古学の役割であるとした上で、オーストラリアやニューギニア島、ソロモン諸島などのニア・オセアニアへの移住を第一幕、ソロモン諸島より東、とりわけポリネシアと呼ばれる広大な海世界へのオーストロネシア人の到達を第二幕としてオセアニアへの移住の歴史を説明する。後藤は後者の具体的な経路や、新しい島での環境資源の利用、首長制という社会的階層などを検討した上で、アジア起源のオーストロネシア集団が西部ポリネシアにたどり着いた後、そこで長期間滞在していた時に社会の「原型」が出来上がり、その後、移動が再開され、15世紀以降に各諸島が孤立するとそれぞれの経路で変化したことを最新の知見とともに論じる。

「ヨーロッパ人との初期接触から新たな太平洋島嶼世界の生成へ」（風間計博）では、16世紀からはじまるヨーロッパ人との「邂逅と接触の歴史経験」が検討される。オセアニアの人々は「受動的犠牲者」とされてきたが、1960年代以降は「能動的行為主体」としてとらえ直されてきたという。風間はそれを人々の「自律性」や「主体性」の回復として評価しつつも、植民地支配の暴力や現地社会の「移動と個別経験の記憶や伝承、新たな土地への定着、島外で得た習俗や知識、混成言語を持ち帰る過程を等閑視させる」と批判する。そして、ヨーロッパ人の探検船や捕鯨船に乗船し、あるいは奴隷として連れ去られたオセアニアの人々が存在することに注意を促し、受動性と主体性の狭間にある「複雑な状況」を見据える必要性を説く。

「移民国家オーストラリア——流刑植民地から多文化社会へ」（藤川隆男）では、オーストラリアの歴史を移民植民地・移民国家として描く。藤川は、イギリスによる流刑から始まり、オーストラリア政府から渡航費の補助を受けた移民によってイギリス本国との繋がりを強めていった一方で、ゴールドラッシュを契機に中国系移民が増加し、非白人を排除する差別的な移民政策である「白豪主義」が始まり、それが1970年代まで続く過程を描写する。第二次世界大戦後、アジアからの移民が急増し、多文化主義へと移行していくが、藤川はそうした政策転換の背後に、オーストラリア政府の「個人を単位とするカラブラインドな新自由主義的政策」があると指摘する。藤川論文ではネットで閲覧可能な資料へのアクセス方法が書かれており、専門家のみならず、一般にも歴史を開いている点も興味深い。

「ハワイの内側から見るハワイ史」（矢口祐人）では、冒頭で先住民であるネイティブ・ハワイアンたちはハワイ島マウナ・ケア山に30メートル望遠鏡（TMT）の建設が計画されていることに反対していると説明し、それを聖なる山を守ろうとする運動としてのみならず、

「帝国の利権争いとハワイアン抵抗の系譜」としても考える必要があると指摘する。矢口は「歴史を先住民の眼差しから書き換える試み」をしていく。1893年の白人によって起きたハワイ王国のクーデターをハワイアンがなすすべもなく受け入れたのではなく、激しく抵抗していたこと、1959年にハワイ州への「昇格」に対してハワイ王国の回復から遠ざかるとして反対があったことを指摘し、「ハワイの内から外を眺める歴史を作っていかなければならない」と論じる。

「先住民マオリアのアオテアロア・ニュージーランド史」(深山直子)では、先住民マオリの国としてのアオテアロアとヨーロッパ人の移民・植民の国としてのニュージーランドとの重なりとズレの歴史を論じたものであるととらえることができる。焦点となるのは、1840年にイギリスとマオリの首長らとの間で締結されたワイタング条約であり、とりわけそこで謳われていた土地や資源に関するマオリの権利が守られなかったことである。深山は、植民地支配の過程でマオリたちの中で宗教運動が行われ、裁判あるいは国会でワイタング条約の遵守が主張されるなど、多様な抵抗が試みられたこと、1960年代から70年代にかけて「マオリ・ルネサンス」と呼ばれるマオリ文化の復興が叫ばれ、1975年にワイタング条約法が制定されると、土地の収奪に対する和解が模索され、海域をめぐる慣習的な権利が認められていく過程を描く。深山はマオリ社会が都市化したともに、そこで「再部族化」きたなど、マオリの人々も変化の中にある点も指摘する。

「パプアニューギニア史におけるホモソーシャルな政治と女性たち」(馬場淳)では、パプアニューギニアの歴史を、ホモソーシャル(男同士の絆)な政治史と女性史を関連させながら読み解いていく。馬場は、伝統的に女性はさつまいもの栽培などの生産労働を担ってきたことなどを挙げ、女性と男性が「相互補完的」な「行為主体」であったが、植民地支配の過程で男性が警官や役人となる一方で、女性は歴史の「表舞台」から消えていったと論じる。馬場は独立に至る政治的な過程からはほぼ除外され、また、1975年の独立以降、現在まで議会での女性議員の割合が著しく低い(0%から3%弱)ことを明らかにしつつも、女性グループが社会の安定のために重要な役割を果たしてきた点を指摘する。

「焦点」の5論文がそれに続く。「フランス領ポリネシアの歴史」(桑原牧子)では、タヒチ島バペーテの賑わいや「文化的混淆」を描写した後、「フランス領ポリネシアの人々が生きる現代につながる歴史」を紐解いていく。フランス領ポリネシアの人々にとって重要な記憶は、「高貴な野蛮人」という楽園幻想が作りだされた探検航海におけるヨーロッパ人との接触ではなく、キリスト教の伝道にまつわるものであると指摘する。桑原は、伝道活動がポマレ2世というアライ(首長)によって進み、伝統信仰が廃止されていくが、プロテスタント教会を重視し、カトリック教会の宣教師を追放したことによってフランス政府の介入と植民地統治へとつながっていった過程を描写する。また、20世紀後半に植民地統治への反対運動が起こるも、1958年の国民投票ではフランスからの独立が否決される。そ

して、1966年から74年にかけてムルロア環礁などのツアモツ諸島にてフランス政府によって核実験が行われたことで社会が大きく変わったと論じる。

「民族の対立と統合への可能性からみたフィジーの二〇世紀の歴史」（丹羽典生）では、フィジーは、先住系、インド系、ヨーロッパ系を中心に、メラネシア系、ポリネシア系、中国系などの民族集団を抱える多民族国家であり、その歴史は民族ごとに分断されていると指摘した上で、二大民族である先住系とインド系の対立と連帯の歴史を描き出す。フィジーは1874年にイギリスの植民地となり、1879年から1916年にかけてプランテーションの働き手としてインド人契約移民労働者が導入され、土地所有権を持つ先住系、資本を持つ経営者となったヨーロッパ系、雇用されたインド系という民族と階層が重なりながら分断された社会の原型が出来上がり、それが現在まで続いているという。丹羽は1910年代と1950年代に起きた反植民地運動、そして1970年のフィジー独立後のフィジー労働党の結成に民族の差異を超えた連帯の可能性を見出すものの、「あり得たかもしれない可能性としての水準」ととどまると論じる。

「ソロモン諸島史にみる社会運動の系譜——植民地期からポスト紛争期まで」（石森大知）では、社会運動からソロモン諸島の歴史をとらえ直していく。イギリスによってソロモン諸島が植民地化され、プランテーション農園が本格的に始まるとともに、植民地政府による人頭税などの統制が強まる中で、反植民地主義運動が起きる。戦後になると、マライタ島では農園労働と人頭税の拒否と、伝統文化（カスタム）の成文化を目指すマアシナルールが、メソジスト教会の影響が強かった西ソロモンでは反教会と「島民による島民のための教会」を目指す運動が起こる。独立後、1989年から2003年に首都のあるガダルカナル島の島民によるマライタ島民への襲撃に端を発して「民族紛争」が起きたが、それはモロ運動という伝統文化に基づく生活実践をしながら経済的な自立を目指す社会運動の影響を受けたものであると論じる。

「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治——委任統治と「島民」の創出」（今泉裕美子）では、現地住民の「福祉の増進」が図られたとされる南洋群島における日本の統治を再検討する。南洋群島ではキリスト教の布教を重点におくスペイン、産業開発や現地住民の教育にも着手したドイツによる統治を経て、第一次世界大戦後、国際連盟の委任統治制度によって日本の統治下へと入る。今泉は日本統治下において製糖業や漁業などにより経済的な発展を遂げたが、現地住民は植民地の序列の底辺に位置付けられ、彼らの労働賃金は低く抑えられていた、また、公学校が設置され現地住民もそこに通ったが、国語と修身などの天皇制秩序と「島民」としての役割を教えるものであったと論じる。

「小笠原諸島史」（石原俊）では、現在の日本領の中でも「非常に独特な歴史的背景」を持つ小笠原群島と硫黄列島の歴史を紐解く。19世紀初期まで定住社会が存在しなかった小笠原群島には、捕鯨船や帆船からのアジールとして、「多様なルーツや経歴を持つ雑多な人々

が上陸・移住」していったが、最終的に明治政府によって領有される。小笠原群島ではサトウキビ栽培と製糖を主産業とする開発が行われ、硫黄列島では開拓農民の大多数が小作人という特殊なプランテーション社会が形成された。太平洋戦争末期になると小笠原群島と硫黄列島の住民の多くが疎開対象となり、残った者は戦闘に巻き込まれた。戦後、小笠原群島ではまず先住系の人々の帰還が認められ、1968年に施政権が日本に返ると本土系島民も移住が認められたが、軍事的な利用によってそれまでの生業は不可能となり、多くが公共事業での職に就くことになる。他方の硫黄諸島は日米の軍事的な利用により、今でも住民の帰還が認められていない。石原は日本やアメリカという「覇権国家が生み出す矛盾を、一身に背負わされた」と論じる。

本書はオセアニアの海と島の歴史と真正面に向き合った歴史研究であり、既存の歴史や地理的な区分を自明視せず、オセアニアから歴史を考え、歴史からオセアニアを考えるものである。

オセアニアの歴史はこれまでヨーロッパ人による支配の歴史と同義であり、オセアニアの人々はその支配を被る存在として描かれてきた。本書はオセアニアの人々の視点からその歴史を描きなおす。ただし、風間論文が指摘するように、単純に受動性を否定して主体性を美化したものではなく、その狭間に位置する「複雑な状況」を見据えたものである。この点は、先住ハワイアンがいかに支配され、そしてそれに抵抗してきたのかを描く矢口論文やポマレ王朝の歴史を詳述する桑原論文、現地の社会運動に注目する石森論文に明瞭にみることができ。また、現地の人々の視点から読み直した論文以外にも、バランスよく両者の視点から描いたものや、今泉論文のように支配者側を批判的に検証した論文もあるが、いずれの場合でも両者の複雑な関係性が議論の前提になっている。

ただし、ヨーロッパ人やオセアニアの人々といっても多様な主体を含む。本書ではこの点にも注意が払われている。ヨーロッパ人に関しては多くの論文で植民地政府に加えて、探検船や捕鯨船の乗組員やビーチコマー、キリスト教の伝道者などが登場するのに対して、オセアニアの人々も首長や平民、あるいは馬場論文のように性差などの現地社会の差異と関係性に注目したものもある。また、石原論文が提示する小笠原の先住系の人々も、ヨーロッパ人ビーチコマーやネイティブハワイアンなどの多様な出自を持つことが指摘されている。さらに、ヨーロッパ人やオセアニアの人々は歴史的に変化し続けてもいる。その点は、後藤論文を読めば「先史」時代にも「歴史」があり、いかにそれが変化し続けて現在へと至るのかがわかる。深山論文における都市に住むマオリのように、その変容は現代においても続いている。

太平洋や太平洋海域世界の中心をなすオセアニアの地理的な区分（ポリネシア、メラネシア、ミクロネシア）も自明なものではない。ヨーロッパ人がオセアニア世界に触れ、そこに



住む人々と接触するなかで作りだされていったものであることが棚橋論文で示される。オセアニアの人々の移動に注目した風間論文からは島と人々を固定的にとらえてはいけなことがわかる。この点は丹羽論文ではフィジーの歴史とは先住フィジー人の歴史か、それともフィジーという国に現在住む人々の歴史なのかという問いかけにも通じるものがある。

『岩波講座 世界歴史』はこれまでも1969年と1997年にも刊行されているが、ここではオセアニアはまとまった形で取り上げられることがなかった。他方で、日本語で書かれたオセアニアの歴史には1987年に『民族の世界史』シリーズの中で石川栄吉（編）『オセアニア世界の伝統と変貌』が、2000年には『新版 各国史』シリーズから山本真鳥（編）『オセアニア史』が、いずれも山川出版社から刊行されている。本書でも多くの論文で引用されており、この二つの本の延長線上に本書を位置付けることができるだろう。二つの本と比較した時に、多様な主体からみた歴史という点に本書の特徴がある。もちろん、石川編（1987）と山本（編）（2000）でもオセアニアの人々の視点からみた歴史も描かれている。しかし、本書はその点をさらに深めていくことで、オセアニアから歴史を考え、歴史からオセアニアを考えるという二重の作業を同時に行うことを可能にしている。

さて、棚橋論文の最後では、これまでの「出遭い」をめぐってこれから新たな「出会い」に開かれていると論じられている。棚橋論文の別の箇所では、保莉実の「歴史実践 (historical practice)」が引用されており、それは「日々、誰にでも沸き起こるような『なぜそのような今があるのか』という疑問について考え、答えを見出そうとする行為」と説明されている。他にもオセアニアの人々は「口伝えの歴史 (口頭伝承 oral tradition) によって祖先たちが経験した出来事や事件の記憶をたどり、受け継いできた」のであり、歴史実践は必ずしも文字によって書かれたものに限らないとある。そうであるならば、多様な主体が、多様なメディアを利用しながら実践してきた多元的な歴史実践の積み重ねを私たちはどのように引き受けることができるのだろうか。それを考えることが、新たな「出会い」になるのかもしれない。

#### 注

- 1) 荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畑洋一・富谷至・中野聡・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直己・吉澤誠一郎 n. d. 「編集にあたって」 <https://www.iwanami.co.jp/news/n43808.html> (2023年7月16日閲覧)
- 2) コラムのタイトルと著者のみここで紹介したい。「東洋文庫における太平洋海域史資料」(牧野元紀)、「オーストラリア先住民民族と歴史の場所——エアーズ・ロック」(窪田幸子)、「歴史の場としてのマウナ・ケア」(井上昭洋)、「歴史の中の文身——ポリネシアのタタウ」(山本真鳥)、「日本に渡ったウリ像——小嶺コレクション」(山口徹)

参 照 文 献

- 石川栄吉（編）1987 『オセアニア世界の伝統と変貌』 山川出版社
- 保苺 実 2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史  
実践』 御茶の水書房
- 山本真鳥（編）2000 『オセアニア史』 山川出版社